

概要：

本論文はカザンラクのトラキア人墳墓における天井画の解釈を目的としている。トラキア¹は現在の北東ブルガリア、南東ルーマニアにかけての地域を領土としており、カザンラク古墳は現ブルガリアのほぼ中央に位置している。紀元前5世紀から紀元前4世紀に建造された地下墓で、円形の主室（トロス）と長方形の前室を持つプランであり、主室には釣鐘状のドームを持つ。主室のドームには天井画が残されており、ハイライトやハッチングの使用などのヘレニズム時代の絵画芸術の特徴を見ることができる。

カザンラクのトラキア人墳墓のドーム天井画の構成は二重同心円となっている。中心には、3台の戦車の描かれたフリーズがあり、その外側に、神殿建築を模した空間設定がなされ、玉座に座る夫妻が描かれた主要なフリーズがある。すなわち、アーキトレーフ、フリーズ、コーニスからなるエンタブラチュアが細部装飾にいたるまで克明に描かれ、玉座に座り手を取り合う夫妻と、ザクロ²などの供物を捧げる侍女らの様子が、ヘレニズム流のメガログラフィアによって描かれている。これはパルテノン神殿やアテナ・ニケ神殿の浮彫彫刻を思い起こさせるものである。すなわち描かれた人物は神もしくは神と同等の存在であるということであり、カザンラクのドーム天井画に描かれた玉座に座る夫妻の神格化を示唆する表現である判断することができる。

玉座に座る夫妻の葬祭図像として最も一般的なものはハデスとペルセフォネである。時代はやや遡るが、紀元前6世紀頃のものである、スパルタ出土の〈墓碑浮き彫り〉と比較してみる。玉座に座る冥界の王と王妃は崇拜者からザクロ等の供物を捧げられており、これはカザンラクのドーム天井画と非常に類似している。この例によっても、玉座に座るカザンラクの夫妻は、冥界の王と王妃として神格化され、崇拜の対象となっていることがわかる。

カザンラクのドーム天井画の持つ性格として、婚礼的要素が指摘されている。婚礼図像として重要なヘレニズム美術の作例である、以下の3作品と比較して考察する：①〈アルキディケの彩色墓碑〉（ギリシア、ヴォロス出土、前200年頃）②〈アルドブランディーニの婚礼図〉（ローマ、エスキリーノ出土、前1世紀半ば）③〈ヘラとゼウスの婚礼図〉（ポンペイ、悲劇詩人の家、1世紀半ば）。

①は夭折した娘の花嫁姿を描き、死後の世界での幸せを願った供養のためのものであるのに対し、②は実際に行われた結婚式にギリシア神話の神々を登場させた、記録的な性格を持つ作品であると考えられる。カザンラクのドーム天井画は神格化され、崇拜の対象となった夫妻の死後の世界での様子を想像して描いた、弔いの性格を持つものであると解釈することができ、①の性格に類似している。

ドーム天井画の夫妻の図の特徴の一つである、2人が手を取り合った様子<右手の握手>の解釈のための手がかりとして、③の例と比較する。この作品ではヘラとゼウスが手を取り合った姿で描かれており、これは古代の図像において2人が結ばれたことを表す図像である。トラキアでは妻は夫の死に際して犠牲となり、共に墓に埋葬されるという習慣があった。ドーム天井画の夫妻の手を取り合う表現は、死後の世界に旅立ってもなお2人は共にあるということを表しているとして解釈することができる。

以上により、ドーム天井画の解釈として、神殿建築の空間設定のされたフリーズに描かれているということ、玉座に座り、供物を捧げられているということから、夫妻は神格化され、崇拝と吊いの対象となっていると考えることができる。死後の世界に旅立つ2人は現世を離れてもなお添い遂げることを誓い合っている様子を、手を取り合った姿で表現していると解釈することができる。

1 複数の騎馬遊牧民族によって形成された。紀元前6世紀末から紀元前5世紀初頭にかけてオドリュサイ族による統一国家が築かれる。

2 ザクロは冥界を象徴するほか、再生、豊穰を象徴する。